

ー 大学病院における診療看護師としての活動 ー

日本における診療看護師(Nurse Practitioner以下NP)教育は平成20年から大学院修士課程で行われ、現在984名(2025年4月現在)のNPが活躍しています。

NPは「対象者のQOLの向上を目指して、対象者の「症状マネジメント」を、自律してタイムリー、かつ効果的・効率的に行うことができる看護職」(NP協議会)です。

私は、入職から本院手術室に配属になり、病棟勤務も経験し看護師10年目に手術看護認定看護師の資格を取得し、本院、八千代医療センターでも活動を行いました。そしてこの経験から、学びを深め自己の新たな幅を広げ、臨床における安全閾値の向上を目指して大学院に入学しました。大学院の2年間は職場支援もあり、働きながら仕事との両立を行いました。過酷な環境でしたが、学びながら臨床との関わりがある環境は学びをすぐに臨床で生かせる場面もあり、非常に貴重で充実していたと振り返ることが出来ます。

2019年NP資格取得を行い、内科外科を含む6診療科で研修を行いました。このプログラムは、当院では初の試みであり、開始までは、看護部長と何度も調整を行い、研修に至りました。全ての診療科で、丁寧なご指導を受け多くのことを学びました。研修後は看護部に所属し、心臓血管外科に出向し活動を開始しました。当院初のNPであり、院内のシステムはゼロからのスタートでした。現在はNPの仲間達と周囲の支援のもと必要なシステムを整えながら、課題に取り組んでいます。



患者さんへの処置の様子

NPの一日のスタートは回診からはじまり、カルテ診察や診療記録、処置では術後の創部確認やドレーン抜去、ICUから病棟帰室患者の中心静脈、動脈ラインの抜去など多岐に渡ります。日々行われる処置やコンサルテーションなどチームの医師と調整し、優先順位を決めて実施しています。ドレーン管理では、疼痛が強い場合は痛みのアセスメント、疼痛コントロール状況を把握し、総合的評価を行った上で、抜去の必要性について医師に調整し、抜去することもあります。処置では患者さんに理解できるように丁寧な説明を心がけ安全安楽に実施することを常に念頭におき実践しています。病棟では、患者からの情報をキャッチした看護師さんが不安で相談してくれたことをきっかけに、患者診察を行い、脳卒中を疑い、CT検査で術後脳梗塞が見つかった事例もありました。明らかな症状ではなく、患者さんの何気なく話してくれた事を、相談してくれたことがきっかけでした。看護師の日々の細やかな観察や関わりが、患者回復過程においてとても重要と再認識した出来事でした。医師をはじめとして看護師、理学療法士、言語聴覚療法士、栄養士、社会福祉士、薬剤師など他職種のスタッフとの関わりも多く、患者の治療はさまざまな職種に支えられて成り立っていることを実感します。部署横断的に活動できる立場として、患者のケアやキュアが円滑に行われるように連携する立場でもあったと感じます。

患者さんにも、一緒に働く仲間にもタイムリーな関わりを通してお互いがWIN-WINな関係となり、患者さんが笑顔で早期退院を目指すための支援を今後も継続していきたいと思います。